

## 大分方言における可能表現

## — 意味構造に関する一考察 —

松田美香

On the Expression of Ability in the Oita Dialect : Its Semantic Study

Mika MATSUDA

## 1. 目的

これまで日高・種・糸井ら(1977-1991)によって、大分県内の可能表現が3区分されているという調査結果が出された。その後、神部宏泰(1992)「九州方言における可能表現～形式の隆替と表現特性～」<sup>1</sup>が発表され、その中で大分方言の可能表現3区分の記述もされている。さらに、通時的・共時的(全国的)視点から可能表現を研究した渋谷『日本語可能表現の諸相と発展』(1993)も発表され、「可能の条件スケール」と「可能表現の変遷過程」が提示された。

本稿では、これらの先行研究の結果と臨地調査の結果を合わせ、大分方言の可能表現について、おもにその意味構造を考える。具体的には、渋谷(1993)等に見られる大分県方言調査の問題点(2-5.)を糸口に、筆者の行った小調査の結果等を加味して、可能表現の構造に新たな提案を試みる。

## 2. 先行研究

2-1. 『九州方言の基礎的研究』(1969)<sup>2</sup>

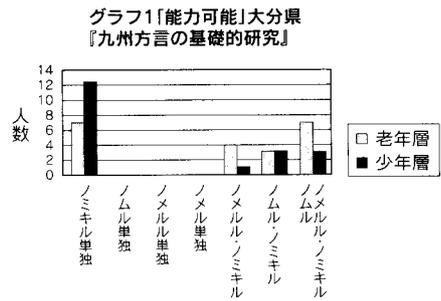
九州では多くの地域で、「能力可能」と「状況可能」の2区分が行われている。

能力可能(不可能)：その動作主体にそう

するだけの能力が備わっている(いない)ので、そうすることができる(できない)

例 英語ワ知ランカラ 英語ノ本ワ 読ミキラン

状況可能(不可能)：(その動作主体にそうするだけの能力は十分あるのだが、)その力を発揮するだけの条件がそろっている(いない)ので、そうすることができる(できない)

例 ココワ 暗イカラ ココデワ 本ワ読マレン<sup>3</sup>

語形(単独・併用別)

※ 少年層 ヨーノム1(南海部郡鶴見町)  
『九州方言の基礎的研究』から作表

質問文 能力可能

「盃一杯ぐらゐの酒なら、私だつて飲むことができる。」(グラフ1)

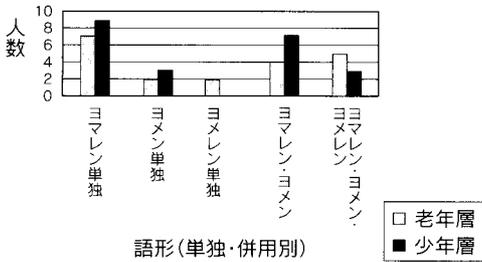
「ノミキル」よりも「ノメルル」や「ノムル」の方が古い語形ということがわかる。

1 神部宏泰(1992)『九州方言の表現論的研究』和泉書院

2 九州方言研究会(1969)風間書房『九州方言の基礎的研究』

3 定義と例文は日高(1991)「九州方言の可能表現」『大分県史 方言篇』(246~247P)を参照。

グラフ2「状況可能」大分県  
『九州方言の基礎的研究』



質問文 状況可能

「こんなやかましい処では、本など読めない。」  
(グラフ2)

グラフ1、2から以下のことがわかる。

- ①キル／キラン・・・能力可能専用。新語形。
- ②ラ・レル／ラ・レン(ヨマレルなど。以後はラ・レンで表す)・・・状況可能専用
- ③可能動詞形・・・能力可能にも状況可能にも使用される。能力可能では併用語形として生き延び、また状況可能では新興勢力として力を伸ばしている
- ④可能動詞+レル／レン(ヨメレン、ノメレンなど。以後は「可能動詞+レン」で表す)・・・能力可能にも状況可能にも使用される。能力・状況のどちらからも衰退傾向が見られる。

2-2.日高・種・糸井の研究(大分県内)

1) 種・糸井(1977)「大野川流域における可能表

現」大分大学教育学部『大野川～自然・社会・教育～』

「自己の主観性の強い判断を基調とする可能・不可能で、従って、恒久的にある事態に対して使用されるのではなく、多くは、臨時に生ずる性質のものに対して用いる述べ方(一ルル、一レル系)」をB形として、A、B、Cの3区分を提示した。(図1)

「『主観状況可能』の形式は以前は可能動詞であった。しかし、その後それにルル(レル)という二段(一段)に活用する助動詞を一律に接続することによって、更に安定した語形を志向する姿と見なすべきであろう。」日高・種(1981)

このように、中央からもたらされた可能動詞形は、そのままでは定着せず、以前から使用されていた助動詞「ルル・レル」を一律に添加して定着しようとしていると解釈された。

2) 日高(1983)「大分県国東半島の可能表現」『大分大学教育学部研究紀要』大分県国東地域特集

話者が発した3形式のそれぞれ意味の違いを説明させていて、これまでに抽出された意味の区分を裏付け・補強する回答を得ている。また、この調査では選ばれる形式に個人差が生じることが報告されている。

3) 日高貢一郎(1990.03)「大分豊後水道域方言地図集(昭和60～63年調査)」大分大学教育学部国語科研究室

大分県中部～南部～東部に渡る県の約3分の1になる地域の方言地図(60歳以上の男女)。形式から意味を問う質問もしている。食ベラレン・・・「くさっているとき」が多く、客観的状況可能の意味。

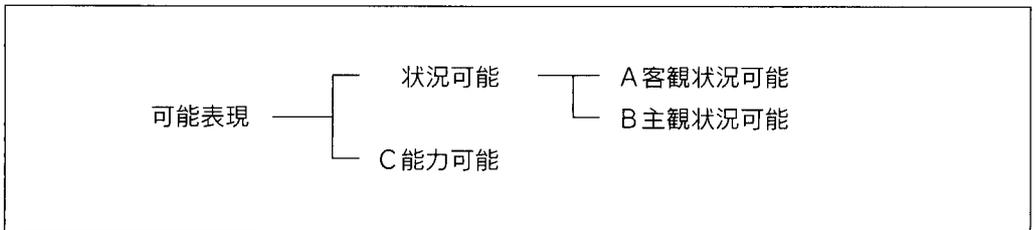


図1 日高・種(1981)における可能表現の区分

日高・種(1981)「大分県津江地方の可能表現」『大分大学教育学部研究紀要』大分県津江地域特集

食べキランとヨー食ベン（一緒に質問されているので分けられない）・・・「嫌いなとき」が最も多く、「満腹なとき」も多い。

食べレン・・・圧倒的に「満腹なとき」が多く、他に「嫌いなとき」「体調が悪いとき」「食欲がないとき」が散見。（動作主体内部の「一時的な」条件）

主観状況可能の形式とされる「可能動詞+レン」は、動作主体内部の一時的な状態（条件）で「できる・できない」を表明することがわかる。

### 2-3. 神部の研究（九州地方）

1) 神部宏泰（1987）「九州方言の可能表現法—その存立と特性—」『兵庫教育大学研究紀要』

2) 神部宏泰（1992）『九州方言の表現論的研究』和泉書院（第6章 第1節「九州方言における可能表現～形式の隆替と表現特性～」）

「この地域での「能力可能」形式は、既述のとおり、新来の「～キル」である。ところで、この形式が一般化したことにより、衰退したのが、「可能動詞」および「可能動詞+ルル（レル）」である。（中略）新形式に押されて衰退する旧形式は、社会性が薄れて、機能が一方的に局限に限定され、内向性を帯びるようになることが少なくない。いわば、話し手中心の、主情性の強い表現を仕立てるのである。（中略）かつて「能力可能」を支えていた形式が、推移して、「主観状況可能」を表すようになっていくのである。

この推移を、衰退の方向で把握しようとするのが、本項の立場である。」神部宏泰（1992）

### 2-4. 渋谷の研究（全国）

1) 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33巻第1分冊

九州北部は、図2のように考えられている。また、中部地方静岡県にも「書ケール」と「書ケレル」の対立があり、書ケレレル、着レレレルなどの形式も兵庫や高知で報告されているという。このような形式が使用される理由として、「可能形式にはラ行音、特に「レ」音が特徴的である」というような認識が根底にはあるのかもしれないとしながらも、「詳しいメカニズムは不明」としている。

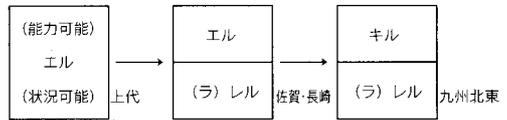


図2 渋谷(1993)における九州北東部の可能表現より（一部改変）

図3のスケール<sup>4</sup>では、左端が「動作主体の力や判断が及ぶところ」の極となり、まず動作主体と密着した心情・性格可能を置き、次に能力可能、さらに内的条件可能（図では内的）とし、さらに右は外的条件可能（図では外的）として、外的要因が動作の実現を左右するのであって動作主体の力や判断が及ばないと説明する。これに従えば、大分県方言の「可能動詞+レン」はスケールのほぼ中央に位置する内的条件可能を分節したことになるのだが、まだ十分には検証されていない。

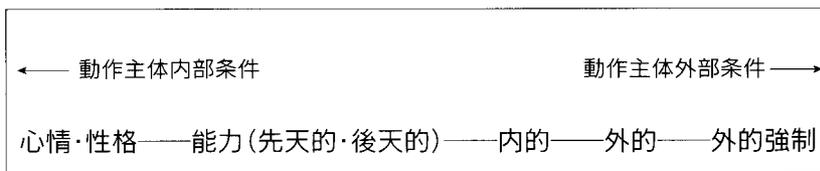


図3 渋谷勝己（1993:32）可能の条件スケール

4 渋谷（1993：32）

内的=内的条件可能：動作主体の力、判断が及ぶが、動作主体の内在条件の永続性においては、心情や能力に劣る（一時的）  
=大分方言の主観状況可能<sup>5</sup>

### 2-5. 渋谷（1993）の問題点について

1989年に同氏が行った梅花女子大学の学生対象の調査報告では、内的条件可能を表すヨーの使用率に問題があるとされている。「それぞれの（内的条件可能の）項目についてのヨーの使用率に大きなバラツキが見られる」という記述がある。また、補注には渋谷氏が1992年に大分方言話者に調査を行った結果報告もある。

一方行ケレン（下線は筆者）は、内的条件可能（動作主体の一時的な条件による不可能を表す）のうち、「今は（めんどうだから）したくない」といった心情的な理由による不可能を表す場合に用いられる。その心情的な意味からして、三人称主語をとることはできない。

この疲れているときに、買い物なんかめんどくさくて行ケレン

\* 太郎は疲れているから、買い物なんかめんどくさくて行ケレン

（中略）なお、「内的条件でも心情的な色合いを伴わない場合、たとえば自分が怪我をしていることを客観的にながめて外出をひかえるような場合には、行ケレンではなく行カレンのほうを使う。

今怪我をしているから、買い物には行カレン

渋谷（1993 41P.補注）

上記例の結果から、渋谷(1993)では「先に設定した可能の条件スケールのうち内的条件可能と外的条件可能については、改めて吟味することが必要になるかもしれない」としている。内的条件にもかかわらず、外的条件の形式によって表現することができる場合があることは、日高(1983)などでも指摘されており、質問文だけでは可能表現形式を特定できないことがあ

る。この現象の解明が、主観状況可能（内的条件）の文節すなわち3区分化のメカニズムを明らかにすることになる。

図3の可能の条件スケールは無効ではないと思うが、このスケールだけでは、大分県方言において何故「主観状況可能（内的条件）」が分節するのが読み取れないことも問題であろう。

## 3. 大分市・大分郡の世代調査

### 3-1. 方法

平成13年7月24、26日、高年層1人、青年層1人に面接調査を行った。

24日 青年層女性 1982年大分郡挾間町生  
26日 高年層女性 1925年大分市賀来生

なお、高年層女性と青年層女性は祖母と孫の関係だが、同居したことはない。高年層女性は、挾間町に隣接する由布川地域の生まれ。22歳から今まで挾間町で居住。青年層女性に転居歴は無い。

この調査はまだ着手したばかりであり、被調査者の数も不十分である。しかし、この結果から予想できることを示して、考察を進めたい。

### 3-2. 調査票

調査票には、2001年1月に九州方言研究会で発表された「可能表現調査票試案」（渋谷勝己氏作成）をもとにして、一段活用動詞を適宜補った64項目を入れた。

この調査票の中の、心情、能力可能、客観状況可能、主観状況可能の項目に限って結果を見ていくことにする。したがって、対象調査項目は36になる。（稿末の調査票参照。）

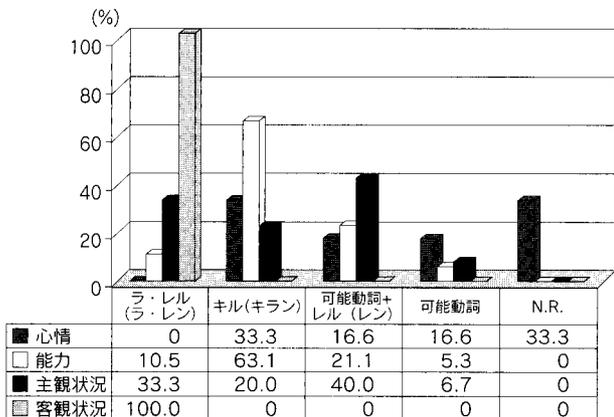
### 3-3. 調査結果

調査結果をグラフ3、4にまとめた。この結果からは以下のようなことがわかる。

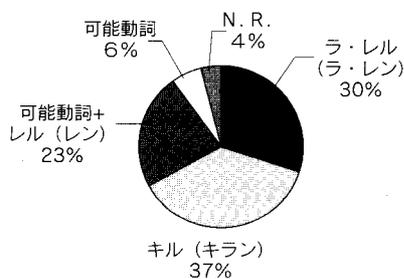
まず、それぞれの形式が可能表現の4つの意味枠にきれいには対応していない。しかし、まったく表さない意味領域もそれぞれにあり、また中心的に表す意味領域もそれぞれにある。

5 現在、内的条件可能が報告されているのは大分方言だけ。

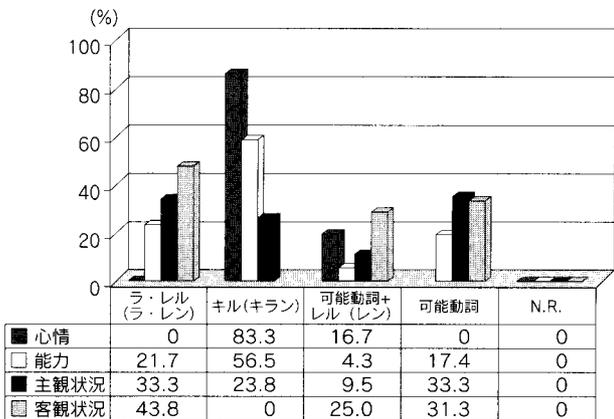
グラフ3 1925年大分市賀来生・女性（高年層）



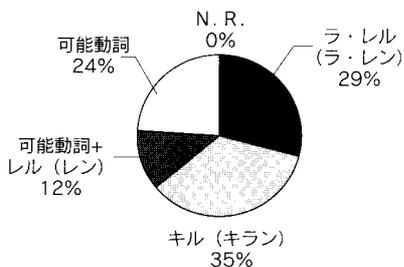
グラフ5 可能表現の形式・1925年・女性



グラフ4 1982年大分県挾間町生・女性（青年層）



グラフ6 可能表現の形式・1982年・女性



「心情」「能力」「主観状況」は、それぞれ可能表現の意味領域を表す

つまり、可能表現に使用される形式には境界のはっきりした意味領域があるのではなく、中心となる意味領域を持ちながらも、隣接する意味領域とも何らかの関係で連続していることを予測させる。

形式別に見ると、次のようなことがわかる。

～ラ・レル (ラ・レン) …心情可能を表さ

ない。主観状況可能や客観状況可能を比較的中心に表すが、能力可能もまったく表さないわけではない。

高年層の方が客観状況可能に使用が100%だった。一方、青年層では、3つの意味領域に使用差があまりない。

～キル (キラン) …高・青年層ともに能力

可能を中心的に表す。また、青年層は心情可能の83.3%をこの形式で表す。高年層は、N.R. (無回答)が出たのでグラフ3の結果になったが、質問を変える(ラブレターということばが使用語彙ではなかった)ことによって、この形式が回答される可能性がある。他には主観状況可能も表すが、客観状況可能は表さない。

**可能動詞+レル(レン)**・・・高年層では主観状況可能を中心に表すが、比較的他の意味領域より多い程度である。他に心情可能や能力可能も表す。一方、青年層では主観状況可能より心情可能や客観状況可能での使用率の方が高めである。この形式の使用数は、高年層11に対して青年層8である。この形式は、世代が下がるにつれて衰退していることが予想される(グラフ5, 6参照)。

**可能動詞**・・・逆に青年層で使用が増えている形式である。全国共通語の影響と思われる。高年層ではまったく使われていない客観状況可能か、青年層では可能動詞で表される率が高い。高年層では、心情可能が一番使用率が高くなっ

#### 4. 大分郡挾間中学校全校生徒調査

##### 4-1.方法

1999年秋に、大分県大分郡挾間中学校生徒全員へのアンケート調査を行った。対象者は、1984～1987生まれの男女で、これまで大分県内から離れて住んだことのない334人(うち男性166人、女性168人)である<sup>6</sup>。

##### 4-2.調査票

可能表現の質問項目は9問。3つの動詞「読む」「着る」「見る」それぞれに3種の可能表現「能力可能」「客観状況可能」「主観状況可能」が出現すると思われる質問文を作り、どのような形式を使うのかを選択式で回答してもらった。選択肢は5～6用意し、複数回答の場合は優先順位を書き入れてもらうことにした。<sup>7</sup>

##### 4-3.調査結果

前稿(脚注7)にまとめたものを、形式別に集計し直してグラフ7にした。この結果(グラフ7)からわかることをまとめると、以下のようになる。(グラフ8～11参照)

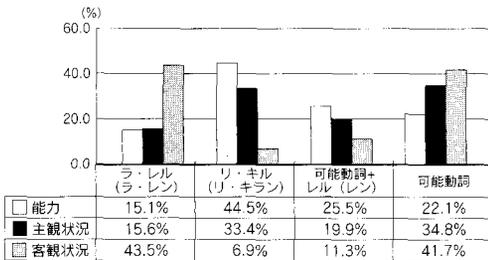
～ラ・レル(ラ・レン)・・・客観状況可能を中心に表す。能力可能と主観状況可能の回答もあるが、いずれも20%以下である。

～リ・キル(リ・キラン)・・・能力可能を中心に表す。また、主観状況可能も表す。客観状況可能はほとんど表さない。

**可能動詞+レル(レン)**・・・際立った意味領域が見出せない。能力可能をある程度表す。他の意味領域もわずかながら表す。

**可能動詞**・・・特に客観状況可能を表す。～ラ・レル(ラ・レン)と同程度の使用率である。次に主観状況可能も33.9%、能力可能も21.6%表す。

グラフ7 挾間中学・可能表現



ているのに対して、青年層では心情可能はまったく表さずに、主観状況可能や客観状況可能、能力可能などを表す。

#### 5. 可能表現の意味構造

##### 5-1.調査結果からわかること

- 6 対象者の中には、県内で転居歴ある者が含まれている。
- 7 拙稿「中学生の方言接触と変化—大分県大分郡挾間町における社会言語学的調査研究—」2001、『別府大学短期大学部紀要』第20号57～73頁を参照。

3と4で、大分市・大分郡挾間町<sup>8</sup>の世代差および中学生のアンケート調査結果を見た。その結果から、当初設定した形式差と意味領域は、厳然と区別されていないということがわかる。その中でも、能力可能と客観状況可能の形式差は比較的よく保たれている（グラフ8と9）。世代が下がるにしたがって、可能動詞の使用が増加するが、それがあある特定の（可能表現の）意味領域を担うものではない。あえて言えば、能力可能よりも主観・客観可能の方により進出しているようだ。

さて、可能動詞+レル（レン）という形式は、1925年生まれの高年層では確かに主観状況可能における使用が多いが、必ずしも意味領域が固まっていたのかどうか、疑問が残る結果となった。青年層では客観状況可能の使用率が高く、中学生では能力可能の使用率が高いなど、単純な世代による変化とは考え難い。

5-2. ならかな分布について

グラフ8～11を見ると、可能動詞+レル（ン）形を除いては、多少例外はあるが各世代ごとにならかな分布となっている。大分方言における可能表現は、順次意味領域がずれていきやすい、境界がファジーな<sup>9</sup>構造であると予想できる。

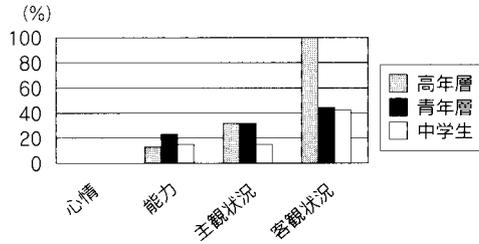
5-3. 可能表現とは何を指す表現か

—可能表現の意味—

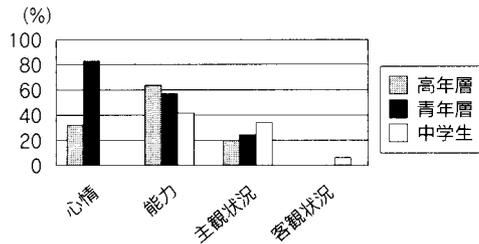
「話者は、聞き手に動作実現の可能（不可能）性を伝える際には、説得力を持ちたい」というのが、可能表現の目指すところである。したがって、説得力が足りない可能の条件の場合には、発話者の感情などで説得力を補強しようとするのではないだろうか。

さて、まずは可能（不可能）の条件を考えてみる。客観的（動作主外部）事象であれば、誰にでも理解できる世界であるから、説得力は十分ある。それに対して、動作主の内なる世界＝内部はどうであろう。動作主の能力や技能は他

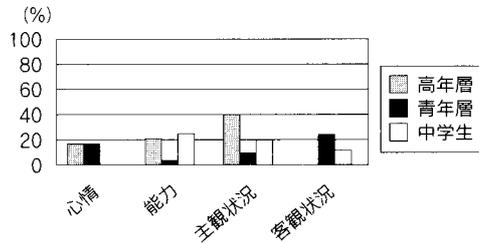
グラフ8 可能表現形式の変化（ラ・レル）



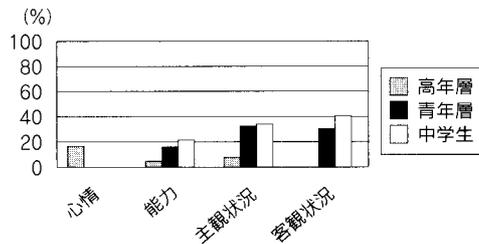
グラフ9 可能表現形式の変化（キル）



グラフ10 可能表現形式の変化（可能動詞+レル）



グラフ11 可能表現形式の変化（可能動詞）



8 先行研究からは、大分市と大分郡挾間町の可能表現には大きな違いは見出せないため、本稿では同様に扱ってよいものとする。

9 池上嘉彦他訳・F.ウンゲラー/H.-J.シュミット『認知言語学入門』（1998 大修館書店）20頁

者でも比較的理解しやすいが、考えや体調などは非常に見極めにくいものである。よって、発話者は動作主のそのような条件を支えるために何をもって説得力とするか。その答えとして、発話者の感情が考えられるのである。これが神部(1992)で述べられている「主情性」である。

5-4.大分方言における可能表現の構造

大分県方言の可能表現における意味構造(メカニズム)を表すには、「客観性」「主観性」「説得力(信頼性)」などを軸にした構造体が適していると考えられる。

大分方言における可能表現形式には、一方に～ラレル(ラ・レル)があり、他方に～キルがある。渋谷(1993)にあるように、ラレルは「自発」の助動詞の形式であり、キルは「完遂」の補助動詞でもある。つまり、可能表現の一方の極を「自発(自然発生・他からの力)」という動作主体外部の力によるものとし、他方の極

が高い(ゆえに形式が比較的安定)  
 「主体内部」・・・客観性が高い～低い(ゆえに形式が不安定)  
 「主体内部だが恒常性が無い」＝主観状況可能(内的条件)・・・客観性が著しく低い(旧主体内部条件表現が化石化?)

大分県でも、図3のように現在の「キル：能力可能」の前は「エル：能力可能」だったとすると、全国的な流行の影響を受けて、中世～近世初期ころから可能動詞形が大分にもたらされたのは確かであろう。もともと可能動詞形にするのは、簡単な変化である。おそらく短期間のうちにこの変化は完了したと思われる。一(二)段活用の場合は、渋谷(1993)にもあるように「過剰般化(over-generalization)」<sup>10</sup>を適応すべきだと考える。つまり、状況(外的条件)可能形式の「着ラレル」から「ラ」を取った「着レル」が採用されたものと思われる。

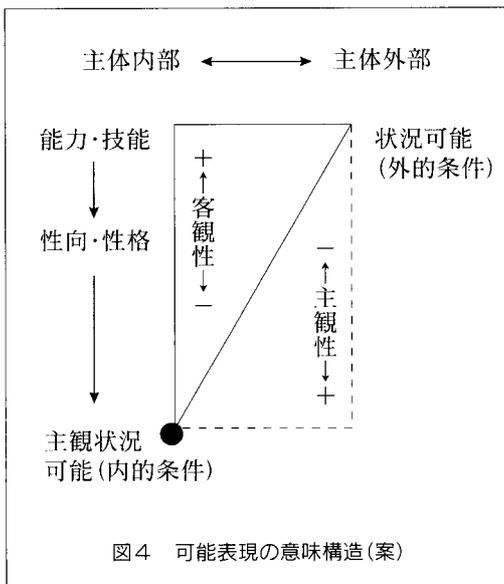


図4 可能表現の意味構造(案)

(図4の解説) 可能の条件について常に説得力を持つようにするため、下方に行くほど「心情・感情(主観性)」が付加される。通常左右(主体内部と外部)で形式が分かれる。「能力・技能」を表す形式は意味の摩擦が起こるため、新形式を次々に呼び込み、旧形式は押されて下降する。よって、旧形式には心情が強く感じられ、話者が動作主体の場合しか使えなくなっていく。その結果、局限的な印象を与えるのである。

を「完遂(完全に成し遂げる)」という動作主体内部の力によるものとしているわけである。今、この両形式が可能表現の一部として使われている(使い分けられている)ことをひとつの枠で説明する必要がある。

「主体外部」・・・客観性が高いので、信頼性

これで一度は安定した可能表現体系に、先述した九州北部から「～キル」が進出してきたため、能力可能の場所を明け渡すことになった可能動詞形は、押し下げられる形で「主観状況(内的条件)可能」の領域に留まった。可能動詞形には共通語の支えがあるため、この部分に収まらずにいるように観察される。また、この分節現象は現在も過渡的状态であることが、先

10 渋谷(1993) 190頁

行研究や調査の結果の揺れから結論付けられる。

さて、書ケレル、着レレルになった時期についてだが、可能動詞の影響で一段活用動詞にも同様の形が生まれ、

子音語幹動詞「書ケル」・・・kak-eru

母音語幹動詞「食ベレル」・・・tabe-reru

さらにそれらを同じ活用形にしようとする動きがあらわれた。

書ケレル・・・kak-e-reru

食ベレレル・・・tabe-re-reru

どちらも活用部分をレルで揃えようとする、これも過剰般化による現象であろう。これは可能動詞が大分方言にもたらされた後ということになる。その近世初期以降に可能動詞が使われ始めた頃から、このような動きは始まっていたと考えられる。現在、中学生が多く用いる可能動詞の前に、すでに可能動詞は大分方言に来て、可能動詞+レルという形に変形していたのである。しかしその後、～キルの進攻によって能力可能から押し出され、「主観状況可能」の意味を担うことになった。やがて共通語の影響で、元の形（可能動詞）に戻され、可能動詞は共通語の威信を受けて客観状況可能の意味領域へ進んだ。しかし、可能動詞+レルはそれに付いては行けず、意味領域も揺れている現状がうかがえる。

上記の変化は、大分方言社会の急速な共通語化によって急激に起こったということが、今回の調査結果からも推測できるのである。

## 6. 今後の課題

まず第一に大分市や大分郡挾間町での世代調査が必要である。世代別に見ることで、史的な変遷がより明確にわかってくるであろう。その時、動詞ごとに可能動詞+レル（レン）の使用頻度の違いがあるのかもしれないので、それも調査したい。また、それに伴い可能表現の意味構造（案）の再検討も必要となるだろう。

また大分方言には～ダス（ダサン）、～オー（オーセン）等の可能（不可能）を表す表現

もあるが、当面は先述の課題に取り組みたい。

## 【謝辞】

本稿は、2001年7月28日に佐賀大学で行われた第12回九州方言研究会において発表したものに、加筆・修正したものです。発表に対して貴重なご教示をいただきました諸先生方に、また可能表現調査にご協力いただいた挾間永子氏、村崎加世子氏、挾間中学校の皆さん（1999年当時）に深く感謝いたします。

## 【付録】大分市・大分郡挾間町可能表現調査票

(一部) 2001.07実施

次の例文を読んで、日ごろ親しい人などと、くつろいだ場面で話す場合にはどう言うか、教えてください。

言い方が1つ以上ある場合は、すべて教えてください。この質問に「答え」はありません。みなさんの日ごろ使っている言い方を知ること、いろいろなことばの研究ができますので、よろしくご協力ください。

注意①多少言い方が変わっても構いません。

②文末にナ、ヨ、ノなど何かことばが付いても構いません。

③ ( ) の中は「そのような場合」を示しています。その事をことばで表しても表さなくても、どちらでもいいです。

心情

1. (こわい) 夜のお墓に一人で行くことができない (行く・五段・1人称)

2. (はずかしい) ラブレターを書くことができない (書く・五段・1人称)

3. (はずかしい) うちの妹は、ラブレターなんて書くことができないよ。 (書く・五段・3人称、近)

4. (はずかしがりや) 太郎は、ラブレターなんて書くことができない。 (書く・五段・3人称、遠)

5. (おそろしい) 庭に生えているキノコを、食べることができない。 (食べる・一段・1人称・新)

6. (派手すぎる) この服は、着ることができない。 (着る・一段・1人称・新)

能力1：生得と獲得

7. (生まれつきからだが弱くて) わたしは泳ぐことができない。 (泳ぐ・五段・生得能力・1人称)

8. (生まれつき体が弱くて) 太郎は泳ぐことができない。 (泳ぐ・五段・生得能力・3人称)

9. わたしは酒を、少しも飲むことができない。 (飲む・五段・生得能力・1人称)

10. わたしは海で、10メートル以上はもぐることができない。 (もぐる・五段・獲得能力・1人称)

11. 練習しているけど、まだ100メートル以上は泳ぐことができない。 (泳ぐ・五段・獲得能力・1人称)

12. (むずかしくて) 「ユウウツ」なんていう字は、書くことができない。 (書く・五段・獲得能力・1人称)

13. うちの孫は、まだ一人で着物を着ることができない。 (着る・一段・獲得能力・3人称)

14. (むずかしくて) そんな仕事は私にはできない。 (する・サ変・獲得能力・1人称)

能力2：人間とそれ以外

15. (重過ぎるから) こんなに重いものは、持ち上げることができない。 (上げる・一段・人間能力・1人称)

16. 鉛筆をうまくけずることができない。 (けずる・五段・人間能力・1人称)

17. このクレーンは、30トン以上のものは持ち上げることができない。 (上げる・一段・道具能力・道具)

18. この橋は、10トン以上の重さをささえる

ことができない。

(ささえる・一段・道具能力・道具)

19. この鉛筆けずりは、きれいにけずることができない。(けずる・五段・道具能力・道具)

能力3：総体と個体

20. 人間は、空を飛ぶことができない。  
(飛ぶ・五段・人間能力総称)

21. ペンギンは、空を飛ぶことができない。  
(飛ぶ・五段・動物能力総称)

主観状況可能 (内的条件可能)

22. (体調が悪いから) 今日の仕事に行くことはできない。(行く・五段・1人称)

23. (気分が悪いから) 今日泳ぐことはできない。(泳ぐ・五段・1人称)

24. (足をケガしているから) 今日泳ぐことができない。(泳ぐ・五段・1人称)

25. (足をケガしていて) 太郎は今日泳ぐことができない。(泳ぐ・五段・3人称)

26. (足をケガしていて) その白鳥は泳ぐことができない。(泳ぐ・五段・3人称・動物)

27. 今(満腹だから) これ以上食べることができない。(食べる・一段・1人称)

28. 寝不足だと、次の朝は早く起きることができない。(起きる・一段・1人称)

29. (お腹の調子が悪いので) 今はベルトを締めることができない。  
(締める・一段・1人称)

客観的状況可能 (外的条件)

30. 明日は用事があるから、郵便局に行くことができない。

(主体による動作決定可・行く・五段・1人称)

31. 今日遊泳禁止の旗が立っているから、泳ぐことができない。

(主体による行動決定不可・泳ぐ・五段)

32. 便せんが無くて、手紙を書くことができない。

(主体による行動決定不可・書く・五段・1人称)

33. そのプールは改装中で、泳ぐことができない。

(主体による行動決定不可・泳ぐ・五段)

34. こんなやかましい所では、本などは読めない。

(主体による動作決定可・読む・五段)

35. この服は小さくなったのでもう着ることができない。

(主体による行動決定可・着る・一段)

36. 忙しくて10時前にはなかなか寝ることができない。(寝る・一段)

以上、関係箇所の一部を抜粋。